大阪定期能楽公演　梅猶会６月公演　大槻能楽堂

定期公演　午後１時開演［開場12時30分］

～ 解 説 ～　10 分

能［熊野］ Yuya　90 分

シテ　熊野　立花 香寿子
ツレ　朝顔　多久島 法子
ワキ　宗盛　喜多　雅人
ワキツレ　従者　中村　宜成
笛　貞光　訓義
小鼓　清水　晧祐
大鼓　山本　寿弥

後見　梅若　修一
梅若　堯之
地謡　井戸　良祐
今村　哲朗
山田　薫
上野　朝彦
永田　克壬
梅若　秀成

～ 休 憩 10 分 ～

狂言［昆布売］ Kobuuri　25分

シテ　大名　善竹　隆平
アド　昆布売　善竹　隆司

後見　上吉川　徹

仕舞　弱法師　梅若　猶義

賀　茂　井戸　良祐
鵜之段　梅若　基徳

地謡　梅若　修一
池内　光之助
梅若　雅一
梅若　秀成

～ 休 憩 10 分 ～

能［安達原］ Adachigahara　75 分

シテ　前シテ　里女　後シテ　鬼女　梅若 雄一郎
ワキ　山伏祐慶　福王　知登
ワキツレ　山伏　佐々木　秀
間　能力　小西　玲央
笛　貞光　智宣
小鼓　成田　達志
大鼓　森山　泰幸
太鼓　中田　弘美

後見　梅若　基徳
梅若　雅一
地謡　梅若　猶義
梅若　堯之
井戸　和男
今村　哲朗
上野　朝彦
永田　克壬

終演予定 17時頃

演目の解説

［熊野］

春爛漫の京都。華やかな装いに反して、平宗盛に使える池田の宿の長（遊女のトップ）熊野の心は老いた母の様子が気になっています。
母からの手紙を携えて来た侍女の朝顔と共に、家に戻るお暇を貰いに宗盛の元を訪れます。文を披露するものの、「哀しい様子ならば、お花見に行って元気をだそうよ」と清水寺に連れていかれる熊野。
失意と絶望感の中に花見に連れ出される熊野の気持ちに反して、描かれる春に浮き足立つ都の人々の姿や、美しい景色が物語を奥深く作っていきます。
桜の儚さに、人の命の儚さ、しいては平家の繁栄の儚さを見事に織り込んだ世阿弥の名曲とも言えるお能です。

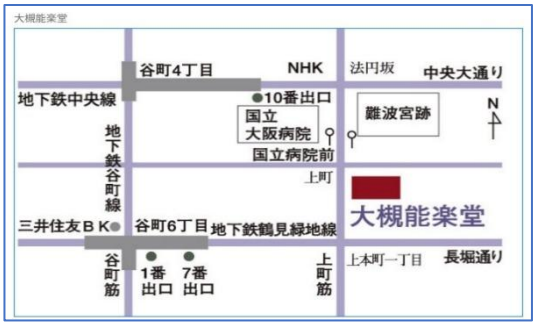
［昆布売］

供も連れずに一人で出掛けた大名。だんだん太刀が重く、偶然通りがかった若狭の昆布売りの商人に同行を命じます。脅され太刀を持たされた昆布売り。我慢が出来なくなり太刀を抜いて大名を逆に従え昆布を売るように強要します。立場が逆転した二人。脅された筈の大名は懸命に売り子を真似るのですが～はてさてどうなることやら

［安達原］

ところは奥州（現在の福島県二本松あたり）今も残る［黒塚］という土地には人喰い鬼が棲む…そんな伝説からうまれた曲が安達原です。
とっぷりと日が暮れた安達原の草原に一軒の灯がみえ、そこに熊野修験者の一行が宿を借りるところから物語は始まります。
業を追った罪深い生きざまに絶望を感じ、悪しき輪廻を絶ちたいと願う哀しい女性。修験者達に請われ、戸を開き招きいれた部屋の中には枠袴輪（糸車）がおかれています。
糸を紡ぐさまを見せて欲しいといわれ、自らの身と心を苦しめる輪廻煩悩を廻る糸車にかけて語る姿は哀愁を漂わせます。
夜が更けて寒さも増すなか、女性は山に薪を取りに上ろうとします。その時にふと思い返し、自分の閨（寝室）を覗かないようにと釘をさしてから出掛けます。
「見るな」と言われれば見たくなるのが人の性。ここでも例にもれずタブーは破られます。屍が軒と連なる恐ろしい光景の前に、逃げ惑う修験者。そこに悲しみの怒りを湛えた鬼女が現れます。
自分を救ってくれる筈の仏の力は、却って己を退治せしめる力となってしまう。心根の少しも癒される事のないままに嵐の音と共に鬼は姿を消していく…人の心の陰影を深く描いた曲です。

大槻能楽堂 アクセス



〒540-0005　大阪市中央区上町Ａ番７号

＊ 地下鉄［谷町四丁目駅］10 番出口より南へ 300m
11 番出口にはエレベータがあります
地下鉄［谷町六丁目駅］７番出口より北へ 350m

＊ 市バス［国立病院］降車　南へ
（大阪駅からは６２系統［住吉車庫前］ゆき乗車）
（あべの橋《天王寺》からは６２系統
［大阪駅前］ゆき乗車）